

四日市「駅前商店街」を歩く

津にある三重短期大学を訪ねた際に、四日市に立ち寄って「駅前商店街」を歩いた。全国の地方都市で中心市街地「空洞化」が問題になっているが、人口 30 万余の四日市も例外ではない。

立派なアーケードが設置されている駅前の商店街も人影はまばらだった。雑誌『世界』4月号の連載ルポで次のように紹介されている。四日市駅周辺には約 10 の大きな商店街があり、店舗は 800 店近い。ピークに比べて売上高は半分、通行



量に至っては半分から 3 分の 1 という。駅周辺の売り上げ減も市内商店数の減少も、ひとえに郊外への大型ショッピングセンター建設によるもので、それもすべてジャスコ系だ。四日市はジャスコの前身である岡田屋発祥の地である。ジャスコは駅前の店舗を 2002 年に閉じたが、前年までに市の南部・西部・北部に 3 つのショッピングセンターを出店していた。大型店のスクラップ・アンド・ビルドであり、四日市でも郊外化が急速に進んだ。



駅前商店街を歩いて感じたのは、商店街ごとにより格差があり、賑やかな通りを一步なかに入ると雰囲気が変わることだ。駅に近い方はまだ人通りがあったが、駅から離れるほど人通りがなくなり、空き店舗も増えてくる。

先の国会で「まちづくり 3 法」が改正された。

郊外への大型店の立地を規制するとともに、中心市街地の活性化を促すものである。中心市街地活性化については、従来のような商店街振興



だけでなく、公共・公益施設などを含め総合的な対策が講じられる。

四日市の駅前商店街の現状を見ていて、今回の法改正により「活性化」できるかが気になる。重要なのは商店街の主体的な取り組みであり、その担い手である。

先のルポは「NPO が担うコミュニティ・ビジネスで商店街が元気に」がテーマであり、商店街にある日替わり(ワン・デイ)シェフのコミュニティ・レストラン「こらぼ屋」が紹介されている。全国的にも注目されている事業であり、また寄ってみたい。

(2006 年 7 月 2 日 記)